

1. 「伊丹市アイフォニックワークショップ」での講演会

本年3月、兵庫県伊丹市文化振興財団から白石キャプテン宛てに同財団が主催するアイフォニックワークショップの講師依頼の話が舞い込んだ。

内容は、今まで世界の民謡をテーマとして行ってきたが、今回は“シーシャンティ”をとりあげたい。開催は8月17日(土)。

これを受けて白石キャプテンは合唱団の存在を示す好機会ととらえ出演することとし、合唱団全員の出演は無理なのでダブルカルテットを組んで参加することとなった。

当日は、キャプテンから指名された各パート2名ずつ計8名がキャプテンとともに伊丹市へ向かった。

14時から「いたみホール」地下1階の多目的ホールで、暑くそしてお盆と高校野球が重なる時期にもかかわらず、40名近い参加者が集まり約1時間半の講演と合唱が始まった。

演題は「みんなで歌おうシーシャンティ(舟歌)」ということだったが、まず参加者にはシー

シャンティとは何かという説明から入らなければならず、キャプテンはこの時、かつてT2の宮崎さんが雑誌に寄稿された論文



「私の研究—帆船時代を唄うシーシャンティ」を参考に話を進め、最初に「うみ」をみんなで一緒に歌ってスタートした。教材用としては「Water is Wide」が用意されたがこの曲は関西地区ではTVコマーシャルでお馴染みのようでメロディはかなり知られている曲とのことだった。皆も大声で楽しそうに歌っていたのが印象的だった。われわれも講演に合わせ途中でデモ用に用意した「Six Pence」「Maggie May」「Drunken Sailor」をダブルカルテットで披露した。

たまたま参加者の中に、わが合唱団のT1木村さん、B2の稲垣さんそしてT2の川島さんの弟さんという“昔の船乗り6人衆”

が神戸から来ておられた。酒を飲んだ後はいつも海の歌を唄っているというこのグループのために、白石キャプテンが時間を作り、彼らが「ジャパニーズシャンティ」と称する「タンツ一節」を披露してもらった。



この曲は、帆船の甲板をヤシの実を半分にしたもので磨くという重労働の際に歌われたものだという説明もあった。さすが海の男の仲間、“息の合った、味のある歌”を唄ってくれました。

今回の講座に参加された方々は、神戸6人衆を除けばたぶん音楽に興味を持ちつつも「シーシャンティ」というものは知らなかった人たちと思いますが、最後まで熱心に聴き、中にはメモを取る人もいました。会場は普通の会議室のようなもので我々がいつも使っている第1教室くらいの広さで、音響もあまり良くなかったため、キャプテンはさぞご苦労をされたことと思います。でもすごくアットホームな感じで講座が進んだので、参加の皆さんはとても和やかな雰囲気でした。ホールの担当者も「初めてシーシャンティを聞きましたが、大感激」と喜んでいました。



終了後我々8名とキャプテンは“せっかくの機会だから懇談の時間を持ちたい”ということで、急きょ京都に宿をとり深夜までいろいろ話し合いをしました。

今回の催しは先方の予算の関係で当方にも少なからず経済的な負担はあったものの、よい経験になったと思います。

(T1 中野節夫)

2. タンツ一節

上記のタンツ一節の歌詞を搜してみました。出典により若干異なりますが、共通して間違いなさそうな部分、“Strike the Bell”の歌詞に関連する部分を中心に抜き書きします。

- ①ボビーの夢を揺籃の 静けきベットに結ぶ時
目玉ランプの物凄く 辺りかまわず怒鳴り込む
 - ②ブレイス曳けとの号令に 飛び出す健児足早く
顔のみ猛き野次馬の 声は力に優るなり
 - ：
 - ④タンツ一掛かれの号令に ガシャガシャサイド
におしやられ (追いやられ、こみやられ)
七つのお鐘が鳴る迄はプープデッキをはい廻る
 - ⑤七つの鐘はまだおろか 八つのお鐘が鳴る迄は
八つのお鐘が鳴る迄はプープデッキをはい廻る
 - ：
 - ⑧洋上遥か東に 思案たっぷり白砂の
簪姿は誰を待つ 惚れた信夫翁が離りやせぬ
- なお、タンツ一とは“turn to”(仕事にとりかかる)に由来し、朝食前の甲板磨きの別名とも言われているようです。